

ぼくのマドンナ

総裁予備選中の昭和五十三年十月十六、七日、「日経新聞」に発表した志げ子夫人論。総理訪米時には『私の履歴書』とともに英訳される

「ぼくのマドンナ」はだれだと聞かれても、私には直ちにこの人だという具体的なイメージが浮かび上がってこない。この答えは、尊敬する人はだれだという問いに対する答えよりも難しい。もちろん、私にとっても少年時代から学生時代、壮年時代から初老の今日に至るまでに、数々の心に残る美しい女性はいた。さらに、印象に残った小説の中のヒロインたちや名画に出てくる美人像、さらには歴史に出てくる様々な優れた女性像もある。

映画のヒロインは、例えばイングリッド・バーグマンのジャンヌ・ダルクであり、原節子であって、それらがいかにも美しくとも、しょせん空想の中に住む女性で、われわれ人生の相對の世界に現実の姿で入ってくるものではない。

また小説に出てくるヒロインたちの中には、近寄り難いまでに美しかったり、限りなく心優しい人が多い。すぐれ

て個性的であったり、魅力的であったりする女性である。しかし、そのいずれもが理想の女性の部分像にし過ぎず、生きた全体像にはなっていない。

三口のビーナスやレオナルド・ダ・ビンチのモナ・リザも、女性美の典型であるといわれる。しかし、そうした映像や彫刻に美は感じて、そこに直ちにマドンナを感じることは言い難い。結局、男性は、現実の人生の中で、具体的な諸々の経験を通して女性を発見し、見出していくものである。男にとって人生とは、現実の生活を通じて、理想の女性を求めていく過程であるといえるかも知れない。つまり、終始自分の側にいる、例えば自分の妻の中に模索し、発掘するよりほかに道はないように思う。

男性の多くは、もちろん妻以外の女性と何らかの交渉を持つことがある。そうした女性の中にも、数々の魅力や美德を覚えることがあるに違いない。しかしそれらの女性との間柄は、どうしても相對的で部分的になりやすい。妻の場合のように、絶対的、全体的なものにはなり難いようである。またそれは、それでよいのである。

私と妻の出会い、昭和十二年の春、平凡な見合い結婚から始まった。突然一人の女性がいつでも自分の側にいる

ことになった。結婚については、洋の東西、古今を問わず無数の警句や格言がある。それは「理想の放棄」であり、「現実との妥協」であり、「人生の墓場」であるとも言われてきた。それでいながら男性は年ごろになれば結婚する。いかにそれが平凡で陳腐であろうと、彼にとってそれは重大な選択である。たとえそれが幻滅の始まりだとしても、それはいやしくも人生の価値を損なうような選択ではないはずである。

私と妻との生活は、結婚以来四十一年を超えた。それは平穩なものであった。妻も私も平凡な女であり、男である。しかし、マドンナはだれかという設問を前にして、私は私の妻の中に、いくつかの女性の持つ美德というものを感じる。それは貧しいものではあるが、私にとってはかけがえない貴いものである。

私は、まず妻に一貫して私と子供に対する真剣な献身を感じる。そしてそれは、結婚式の言葉ではないが「健やかなるときも、病めるときも」また「得意のときも失意のときも」変わることはなかった。献身というのは、自分のことより、献身の対象のことを重くみて、その人のために自分の一部ではなく、その全部を献げることである。そこには微塵の打算もなければ、見栄のかけらも伴わない。

妻は私の健康のことを昼夜をわかつたず心配してくれる。食事のことはもとより、運動、休息、睡眠のことにも絶えず注意を怠らない。健康といえれば肉体的な健康にだれよりも敏感であるが、より以上に私の精神的な健康に敏感である。このことこそは、何といつても女の美德である。私にとってはマドンナの貴い属性であるといえよう。

子供をもつということは、女の大きい負担であるが、同時に大きい誇りでもある。子供を産むことは、女にとって最も手ごたえのある生きがいであり、最も誇り高き役割の一つである。子供をもつた女の姿こそは、マドンナの属性の中でも最高のものである。妻も幸いに四人の子供に恵まれた。そんなに健康でもないのによく産んでくれたものだ。子供たちも妻に対してよくなつているし、友達としてよく行動を共にしている。その情景は美しい。子供たちもそれぞれ家庭をもつようになり、今では、私たち老夫婦だけが取り残された格好になつているが、事あることに妻と子供たちは集まつてだんらんする。そしていつも妻がその中心にすわつている。それは彼女にとっては最も得意な時のようである。

親類、縁者、友人等とのつき合いの大部分は何と言つても妻の仕事である。つき合いの場は人生にとってのオアシ

スである。そこには相手に対する尊敬と評価も大切であるが、相手に対する奉仕と親切心がなければならぬものである。短い人生で恵まれた機縁は、それがどんなに小さいものであっても大切にしなければならぬものである。人生はそこ以外にはなく、その機縁をどのように大事にしていくかが、人生そのものであるともいえるからである。

妻の役割は、この諸々の機縁の結び目を大切に保守し、これに絶えず水をやり、施肥することである。妻はこのことを面倒がらずにやっている。社会的地位の高低や、貧富の差などにより態度を変えることなくやってくれている。私は、このことから、渴いた世の中に潤いを、騒々しい世の中に平穩を、とげとげしい世の中に和らぎをもたらすが、天が女に期待している大切な役割のように思われてならない。

部屋や庭の清掃も妻の大切な仕事であるが、特に感ずるのは、妻は私より道義的潔癖さが強いということである。物事の道義的鮮度に私より敏感である。審美感の繊細さ、道義的感覚の鋭さは、女性のもつ優れた能力であるように思われる。人間の世界の秩序を維持する上で女性が果たす役割は大きい。

妻は平凡な女性であるが、そつした美德は、われわれの

求めるマドンナの素材の一つにはなるはずである。マドンナは特定の女性の姿をとって現れるというよりは、平凡な女性の中に、その広大無辺の徳の一部が平凡な姿で生きているといえないだろうか。